

次は、約3年前に書いてしまっておいたものです。

最近、ある病院で待っている間に本棚を見つけ、そこに行った。その本棚の本は、病院の関係者が寄贈していた本だった。背表紙にざっと目を通した。「手塚治虫」の文字が目に入った。いや飛び込んできた。「手塚治虫」といえば、私にとってはバイブルであった。私の人生最初のバイブルであった。昭和33年にこの世に生を受け、物心がついて最初に出会い、幼かった頃、いちばん多く買ってもらった本、おみやげとして一番多くもらった本、何度も何度も一番読み返した本が、『鉄腕アトム』だった。

何が気に入っていたのかと思い返せば、当時は、全国的に鉄腕アトムブームであった。漫画の神様の手塚治虫の出世作。テレビでの初の長編アニメも鉄腕アトムであった。世の中の動きを知る由もない子どもであった私が、鉄腕アトムを気に入ったのは、たぶん、「正義」が好きだったからだと思う。「やさしさ」「思いやり」も、好きだったと思う。

すぐに手にした。題名は、『夫・手塚治虫とともに』で、著者は手塚治虫の奥様、手塚悦子様であった。手塚治虫に関しては、ある程度のことには知っていた。お亡くなりになられる数年前にNHKでドキュメンタリーが放送されたときには、海外に行く直前まで締め切りに追われまんがをかいていたことなどが映像で紹介され、とにかく超多忙ということも知っていた。いやいや今回は、氏の超多忙さをお伝えしたいのではなく、小さいときに出あったものは、いつまでも覚えているということ。あるとき、ふと思い出されるということ。「三つ子の魂百までも」というか「原点回帰」というか……。

(略)

本は最初から最後まで惹き付けられて読み進めました。ちょっと意外で面白かったというか安心したというか買ってよかったと思ったことを。それは、手塚悦子様でさえ、子どもたちの進学問題にあたっては、「私はガッツーンとアタマを殴られた思いがしました。子どもとは親の思い通りにならないものだ、つくづく思い知らされたのです」と、私自身思った、実体験したことを、実体験されていたからでした。悦子様の方が遙かに先に体験されていますが、また、多分、このことは、ほとんどの親が思うこと、体験されることだとは思いますが。

<追記>

3人のお子様たちは、それぞれ自分の個性、願いを大切に、きちんと就職されご活躍されています。

次は、令和5年6月に実施された「令和5年度（第30回）全日本私立幼稚園連合会 東北地区会私立幼稚園設置者・園長研修会<八戸大会>」冊子からです。

記念講演「子どもたちと楽しむ草花の多様な世界」

静岡大学大学院教授 農学博士 植物学者 稲垣栄洋 先生

【講演要旨】

○ナンバーワンとオンリーワン

「No.1にならなくてもいい もともと特別な only one」。この「世界に一つだけの花」の歌詞に対しては二通りの意見がある。一つは「歌詞の通りナンバー1でなくてもオンリー1であることが大事である。」そしてもう一つの意見は「世の中は競争社会なのだからナンバー1を目指さなくてもならない。」どちらが正解なのだろうか。

自然界では答えが出ている。自然界は弱肉強食・適者生存であり、厳しい生存競争を勝ち残ったもの、すなわちナンバー1しか生き残れないのである。しかし、世界中に沢山の生き物がいるのはなぜだろう。カタツムリなどのようにつまらなそうに見えたり弱そうに見えたりする生き物が沢山いて生き抜いているということは、これらもすべて勝者であるはずなのだ。

ナンバー1になる方法は沢山ある。環境、季節、エサなどどこかの部分でナンバー1になれるオンリー1の場所や物を持っていれば生き残れるということだ。すなわち、全ての生き物がナンバー1でありオンリー1であると言えるのだ。

○雑草の強さは多様性の豊富さ

雑草はいつ抜かれるか、いつ踏まれるか分からない環境に置かれているが、「多様性」を持っているために生き残ることができているのである。

例えばオナモミの実の中には2つの種が入っている。すぐに芽を出すせっちな種となかなか芽を出さないのんびり屋の種である。気候など環境によってどちらが正解なのか、わからないので両方持っているというのがオナモミの戦略なのである。生物、特に雑草は「際立った多様性の豊富さ」のおかげで予測不能な環境を得意としているのである。

このように生き物は多様性を大事にしている。揃ってしまうと全滅する可能性があるのでできるだけばらつこうとしている。

人間も顔、性格、できること、成長スピードなど、一人ひとり違っている。違うことには必ず意味があるのである。

○子どもたちには「自然とのふれあい」が必要

蜂が巣を作ったり、カマキリが獲物を捕って食べたりするなど、昆虫には生まれながらにして生きるための能力が身についている。人間など哺乳類は親から教わったり、友達と遊んだりしながらいろいろなことを覚えていく。このように昆虫は主に本能で、哺乳類は知能で生きていると言えるのである。

しかし本能にも欠点がある。蜂は獲物を捕ったら巣に帰るが、もし途中で落としてしまっても拾わずに一旦巣に戻り、また獲物を捕りに行く。また、ブルーシートを敷いておくとトンボが卵を産むことがある。これらは、獲物を捕ったら巣に帰る、青くて光っている所に卵を産むということがプログラミングされているからなのである。このように昆虫はプログラミングされたことはできるが、状況が少しでも変化すると対応できないのである。

では哺乳類はどうだろう。落としたり拾うなど、状況が変わっても持っている知識や経験から判断し対応することができるのである。だが今までの知識や経験という情報がなければ判断することができない。人間は科学技術を誇っても所詮は生き物である。「知能」を動かすためには情報をインプットすることが必要なのである。

○最初の情報は自然の中にある。

子ども達は自然と触れ合い感じることでより情報を得て、それが知識や経験となっていくのである。わざわざ遠くへ出かける必要はない。それは普段遊んでいる園庭も自然の不思議さであふれているからだ。

『植物の名前など自然について詳しくないから子ども達に教えてあげられない。』と思うことはない。何も教えなくてもいい、ただ子ども達に寄り添い共感するだけで良いのである。子ども達が「これ何？」と聞いてきた時、我々大人はなんと答えれば良いのだろうか。

この時の子ども達は、「これ見つけたよ」、「面白いもの見つけたよ」、「すごいでしょ」という気持ちなのだろう。

そのような時には、「すごいもの見つけたね」と応えたり、「何だろうね」、「どうしてだろうね」と言ったことをそのまま返したりすることで、子ども達なりに考え始めるようになるのではないだろうか。

身近な草花、例えばツユクサは帽子をかぶったように見えることから帽子花、カタバミは葉っぱで10円玉を磨くとピカピカになることから黄金草と呼ばれている。子ども達と『何に見えるか?』を一緒に考えてみることも楽しいのではないだろうか。

○大切なことを見失わない

「雑草は踏まれても立ち上がる」と言われているが果たしてそうだろうか。植物にとっては花を咲かせ種を残すことこそが重要なのであるから、立ち上がりず横に伸びたりすることもある。

また、植物にとって双葉の時期は、目に見えないが地面の中でじっくりと成長している時期である。幼少期の子どもも同じでゆっくりと成長をしているのである。

このように、『何が大切なのか』を見失わずに子ども達と一緒に自然を楽しんでほしいものである。